



放射線治療科の話

放射線治療科

副院長・部長 西嶋 博司

現在、日本では2人に1人が「がん」になり、3人に1人が「がん」で亡くなるなど「がん」は死亡原因の第1位となっています。しかし、治療法の進歩によりがんの患者さんの生存率は年々改善されています。

がんの治療法として主なものには、がん病巣を直接治療する手術治療や放射線治療、全身に作用する薬物療法があります。放射線はレントゲン写真やCT撮影などの検査で利用していることをたまに耳にするとと思いますが、治療としても利用しています。放射線治療では、放射線ががん細胞に照射することで、その細胞を死滅させたり縮小させたりする効果が期待できます。放射線治療は、最初に行なわれるようになってから既に100年以上経った確立した治療法です。

放射線治療の特長は、臓器のはたらきを残した状態で治療ができること、主として病気の場所だけにあてる治療のため全身に及ぼす



副作用が少ないことがあげられます。このため、高齢者や全身状態が不調の方、早期から進化した「がん」など、様々な対象や段階での「がん」治療にこの治療法が関わっています。

放射線治療といっても様々な方法がありますが、リニアックという治療装置から出てくるエックス線という放射線を、体の外から体内の病巣をめぐらせてあてる外部照射という方法が最も一般的です。当院では、呉西地域で最も早く、平成3年からリニアックを導入して治療に取り組んでおり、平成29年からは三代目の新型の治療装置を稼働させています。この装置では治療ごとにCTスキャンを用いての正確な位置合わせが可能で、イメージガイド下放射線治療と呼ばれています。

通常の治療は放射線を毎日少しずつ20回か

ら30回に分けて1か月程度にわたって行なわれますが、疾患によっては「定位放射線治療」という、頭の中の小さな腫瘍などにピンポイントで照射し1日で終了する治療もあります。その他には、前立腺癌に対して小さな放射線のカプセルを埋め込んで治療を行なう小線源治療という方法も行なっています。当院では現在、年間約100名の新たな患者さんの治療を行なっています。治療はチームで実施しており、放射線治療医（常勤専門医1名）、放射線治療専門放射線技師（常勤技師2名）、看護師で協力して行なっています。

昨年、新型「コロナ」感染症が発生してからは日本中の医療が、いわば「有事」の対応を迫られるようになっていきます。都会の大病院から地方の病院に至るまで、これまでとは異なる体制を組まざるを得ない状況です。しかし、「コロナ」の時代だからといって、ほかの病気の進行が遅くなるわけではありません。放射線治療の対象である「がん」についても同様です。当院では、「新型「コロナ」」に対して適切な対応を行ないながら、通常の疾患に対する診療も着実に行なっていますので、治療が必要な方はきちんと受けていただくことをお勧めします。